

▼「人々の呪詛により命を落とした藤原滋実への哀悼」(その三)

【八段】を受けこの【九段】は亡き友滋実に、より具体的に今の心情を、激情がほとばしるように、声高に詠み上げる。今生きている人間に働きかける術を持たぬ道真にとつて、又、生きている人間が自分の無実を晴らし、京に呼び戻してくれる気配の全くない絶望感の中で、今、道真がすがりたいのは、「公正な神」の存在であり「天の神による公正な裁き」である。そしてそれを滋実に必死に訴え願うのは、その「自分」と「天の神」との仲立ちの役目である。滋実が「死者」であるからこそ頼める願いである。私が「無実」であるか否か、公正なる天の神が存在するならば、必ず白黒をはつきりさせてくれるはずだ。自分に疚しさがあるのであれば、命を落とすことも辞さない。もし無実であるならば、天下の者にそのことを明らかにして欲しいと叫喚する。裏を返せば「無実」が晴れないのは、「天の神」の不在に他ならないことを言う。これは須藤修一氏の論する(注三)『白氏文集』「哭孔戡」(注四)の中にある、優れた友「孔戡」を失くしたことに對し白居易が、天の神に訴える二十五句から三十二句「賢者の生民を爲むる／生死懸つて天に在り／天 人を愛せずと謂はば／胡爲れぞ其の賢を生ず／天 果して人を愛すと爲さば／胡爲れぞ其の年を奪ふ／茫茫たる元化の中／誰か此の如き權を執る」の句内容、つまり「天命はだれが握っているのか」という切なる問い掛けが、投影されていると見て間違いないと思う。

【十段】

原文

訓読